

# 祈りの目

作 : 岡崎道成

演出 : 小川政弘

## ★登場人物

わたし(ナレーションも)…特高の刑

大宮建三…牧師

大宮静子…建三の妻

本田……特高の刑事

沢本……海軍将校

## <前編>

—昭和18年(1943年)夏。教会の礼拝堂—

大宮牧師            まことの神様のお恵みとお導きが、今週も皆さんとともにありますように。ではこれで今日の礼拝を終わります。

—ガヤ—

静子                あの、失礼ですが。

わたし             …わたしかな？

静子                ええ、あの、このところ続けていらっしゃっているようですが、お近くの方ですか？

わたし             いや、そういうわけでは。少々興味がありましてね。あなたはここ、長いんですか？

静子                あ、失礼致しました。私、牧師の家内でございます。もしお時間がありましたら、皆さんとお交わりしていらっやいませんか？ まあ、この時局ですから、お茶菓子もございませんけど。

わたし             いや、我々も忙しいものでね。失礼しますよ。

静子                そうですか。あの、まだお名前を伺っていませんでしたね。

わたし             …奥さん。

静子                はい？

わたし             また、来ますよ。

静子                ええ、お待ちしてます。

ナレーション        わたしは牧師夫人に見送られながら、教会の玄関を出た。 —昭和18年の

夏、30人ほどが集まるこの日曜日の礼拝に、わたしが出るようになってひと月。だが、それもこれで最後だ。いや、わたしだけではない。やつにとっても。

ナレーション 翌日わたしは、一人の男を伴って牧師の家に向かった。

静子 はい、はい、ただ今。…あ、あなたは…。

わたし 奥さん、大宮牧師はいるかね。

静子 主人ですか。ええ、おりますけど…

本田 すぐに呼びなさい。ぐずぐずするな。

静子 あの、あなた方いったい…。

大宮 どうした、静子？ ああ、あなたでしたか。わたしに何か？

本田 我々は特高だ。大宮健三、お前を治安維持法違反の容疑で連行する。すぐに支度をしろ。

静子 えっ、特高…。

ナレーション 牧師夫人が驚くのももっともだった。特高—特別高等警察。国民生活の隅々にまで目を光らせ、国の体制に反対する危険な人物を取り締まる、内務省の特別組織だ。我々は、日本の内側に潜む敵と戦っているのだった。戦争中、あらゆる宗教活動は国の指導の下に行われていた。だがキリスト教は、日本古来の神を拝まず、戦争に反対する危険な宗教だ。こんなやつらを、のさばらせておくわけにはいかない。この大宮牧師も、以前から我々が目を付けていたのだが、先週になって検挙の許可が下りたのだ。

—特高の取調室—

ナレーション 狭い取り調べ室で、大宮は不気味なほど落ち着いていた。

わたし おい、大宮。お前は教会で、神社に参拝してはいけないと言っていたな。

大宮 そうです。本当の神は、神社のような人間の作ったものの中にはおられません。

わたし 神社には、かしこくも天皇陛下のご先祖であられる、天照大神が祭られているのだ。日本人のくせに、それに頭を下げないつもりか？

大宮 わたしの信じる神は、唯一まことの神です。日本の神とか、外国の神とか、そんな限られた存在ではありません。

本田 貴様、何様のつもりだ！

—本田、大宮に殴りかかる。ドカッ ガッシャー—

大宮 うっうっ…。

本田 特高を甘くみるなよ。貴様らのような非国民の骨をへし折るぐらい、何でもないんだからな。

ナレーション 連日、厳しい取り調べが行われた。しかし大宮はその信仰を変えようとはせず、特高に配属になって日の浅いわたしを驚かせた。

わたし 本田さん、なるほどキリスト教徒というのは頑固なもんですね。神の国が来るなんて本気で信じてるんでしょうかね。

本田 バカ言うな。お前のやり方が甘すぎるんだ。すぐに出られると思ってやがるんだよ。…おい、今度タバコ、使ってみろ。

わたし タバコ…ですか。

本田 なんだ、やったことないのか。これだから警官上がりは困る。タバコに火つけて、皮膚に当てるんだよ。

わたし 皮膚に…。でもそれじゃあ、跡がついてマズいんじゃないですか？

本田 何がマズいもんか。やつらは日本人の皮をかぶって国民を惑わす敵だぞ。日本を守るためだ。手加減するな。

わたし は、はい。

ナレーション 本田さんのやり方は、それこそ手加減なしだった。わたしは決して人を痛めつけるのが平気なわけではなかった。だが、本田さんが言うように、こいつらは敵なのだ。祖国日本を守り、戦争に勝つためには、だれかがしなくてはならないのだ。わたしは愛国心と使命感に燃えながら、時には力を使って大宮の取り調べを続けた。 —そんなある日。

本田 おい、大宮に面会だ。

わたし 大宮に？ 取り調べ中に面会なんて…。だれですか？

本田 沢本という海軍の将校だ。特別措置だとよ。大宮と旧知の間柄だそうだ。

わたし あいつに軍人の知り合いがいたんですか？

本田 お前、話をこっそり聞いてこい。やつが何を考えているのか、分かるかも知れん。

ナレーション わたしは、大宮を面会室に連れていき、そのまま入り口の陰で、彼らの会話に耳をそばだてた。

大宮 沢本君、よくこんな所まで。ありがとう。  
沢本 それより大宮、こんなことになって、わたしも残念だ。  
大宮 いや、君が今までわたしのためにいろいろ便宜を図ってくれたことには、本当に感謝しているよ。お陰で、ついこの間まで教会で語ることができた。  
沢本 やはりやめなかったのか。どうしてだ？ 今はそういうことが自由に言える時じゃないと、あれほど言ったのに。  
大宮 分かっている。だが、こんな間違っただけだからこそ、人々にキリストの福音と、神の国の希望を伝えなければならんのだ。  
沢本 お前は大バカ者だ。たかが宗教のために、命を懸けるのか？  
大宮 沢本君、キリストは、わたしのために命を捨てられた。それによってわたしは永遠の命に入ることを約束されたのだ。キリストのためなら、この世の命は惜しくはない。  
沢本 …変わらん。宣教師の話を聞いて洗礼を受けた学生の時分から、全然変わらん。  
大宮 いや、変わらないのは神の言葉だ。聖書の教えは、昔も今も、永遠に変わらんよ。

ナレーション 大宮をずっと検挙できなかったのは、どうやらこの沢本の工作によるものらしかった。大方、軍人の地位を利用して内務省に圧力を掛けていたのだろう。それにしても、大宮の考えていることが、わたしには理解できなかった。やつは捕まるのを承知の上で、教会での説教をやめなかったと言うのか？そして、あんな外国の宗教のために、命をも捨てる覚悟だと言うのか？

—取調室—

わたし 大宮、お前、軍人の知り合いがいるからって、安心するなよ。何だったらあの軍人もお前とぐるだって、参謀本部に上申してもいいんだぞ。  
大宮 彼は関係ありません。彼は、信仰を考え直すようにわたしに勧めていたんです。  
わたし ほう、それなら、あの軍人のためにも、考えを改めるんだな。  
大宮 …あなた、名前は？  
わたし …何だと？  
大宮 あなた、この間わたしにタバコを当てた時、苦しそうだった。あなたは、あのもう一人の人とは違うはずだ。あなたのために祈ります。名前を教えてください。  
わたし こ…こいつ、自分の立場を分かってるのか！ この野郎！（殴る）

ナレーション 大宮は、殴るわたしをじっと見つめた。

わたし …なんだ、その目は。おれを哀れんでるつもりか！（殴る）

ナレーション わたしは、大宮に見透かされた心の迷いを振り払うかのように、彼を何度も何度も殴り続けた。

ナレーション 結局大宮は、信仰を捨てないまま、アザだらけの顔で裁判にかけられ、日本の国体に反するという治安維持法違反の罪で、懲役5年の判決を受けた。—それ以後もわたしは、何人ものキリスト教徒を取り調べた。その中には信仰を捨てる者もいたが、ほとんどは大宮と同じだった。だが、何がやつらをそこまでさせるのか考える余裕すらないほど、すでに日本の戦局は悪化していた。

ナレーション 昭和20年8月15日、戦争が終わった。日本が負けたのだった。わたしが最後の勝利を信じて疑わなかった神国日本は、圧倒的物量を誇る米英の連合軍の前に灰燼かいじんに帰した。玉音放送を聞いているわたしの心の中で、あらひとがみ現人神天皇の統治する美しい祖国日本が激しく崩れ落ちる音を聞きながら、わたしは一人ぼう然と立ち尽くしていた。

<後編>

---

ナレーション 昭和20年8月15日、日本は連合軍のポツダム宣言を受け入れ、無条件降伏した。4年間にわたった大東亜戦争は終わった。特高警察の刑事として国家に忠誠を尽くしてきたわたしにとって、日本の敗戦は大きな衝撃だった。そして10月4日、占領軍によって特高は解体され、わたしは戦争犯罪人として告発される恐怖におびえながら、魂の抜けたような毎日を送っていた。—そんなある日。

—ドン(人とぶつかる)—

わたし おっと…失礼。

女 イッターい、気をつけてよ。

ナレーション 化粧の濃い、若い女だった。チューインガムをかんでいた。

わたし おい

女 あたし？

わたし それをどうした？

女 (うるさそうに)…なあに？  
わたし そのチューインガムをどうしたんだ？  
女 なに、この人。  
米兵 ミヤコサン、ドウシマシタカ？  
女 あ、ジャック。この人がね、あたしにぶつかってきたのよ。  
米兵 コノヒトガ？ ヘイ、ユー、ミヤコサンニ、アヤマリナサイ。  
わたし (女に)おい、お前、日本人のくせに、こんなアメリカ兵とベタベタして、チューインガムなんかくちやくちやくで、恥ずかしくないのか。  
女 あら、日本人がアメリカ兵とベタベタして、どこが悪いのさ。  
わたし 戦争に負けたからって、日本人の誇りまで失うな。ついこの間まで敵だったんだぞ。  
女 あっはっは、日本人の誇りだって。そんなもん持ってたって、おなかの足しにもなりやしないよ。  
わたし お前、それでも…。  
米兵 ヘイ、ユー、ヤメナイカ！（突き飛ばす）  
わたし うっ…何をするか、このアメ公！  
沢本 やめろ。  
わたし 何だ、離せ、離せよ！  
沢本 落ち着け、相手が悪い。

ナレーション わたしは、がっしりとした体格の男に押さえ込まれ、引きずられるようにしてその場を離れた。

沢本 ムチャな人だな。占領軍に抵抗したら、すぐに留置所行きだぞ。  
わたし 占領軍が何だ！…あ、あんたどっかで…そうだ、確か海軍の。  
沢本 いかにもわたしは海軍の沢本だが、なぜわたしのことを？  
わたし 大宮牧師の面会に来たあんたを見た。  
沢本 大宮の面会に？ どうしてそれを？  
わたし わたしは特高の刑事だった。大宮牧師を取り調べたのは、わたしだ。  
沢本 特高の…。そうか、君が大宮を。

ナレーション 沢本さんは大宮牧師の友人で、海軍の将校だった。彼はわたしに、終戦の時は参謀本部で軍の指揮に当たっていたことや、日本の敗戦をかなり早い時期に予想してたことなどを話してくれた。

沢本 間もなく戦争犯罪人の指名が始まる。わたしも恐らく指名されるだろう。

わたし どうして…。あなたみたいにお国のために尽くした人が、何で戦犯になるんですか？ どうして日本がアメリカに裁かれなくちゃならないんですか？ そんなの間違ってる。

沢本 確かに、我々はお国のために戦ってきた。しかし、わたしは最近思うのだ。国とは、八紘一宇の国体ではなく、国民一人一人のことではなかったのか。そしてその国民は、戦争が終わったのを喜んでいる。我々は国民にウソをつけて、勝てる見込みのない戦争を続けてきた。その責任は、負わなくてはならない。

わたし それなら、今まで戦死した者たちは何のために死んでいったんですか？ 我々が間違っているのを認めたら、彼らの死は、無駄だったことになってしまっじゃないですか。

ナレーション 沢本の表情は、苦痛でゆがんでいた。わたしも、日本が間違っていたなどとは認めたくなかった。だが敗戦とともに、日本の国体が一夜のうちに消え去ってしまったのは事実だった。我々が守ってきた国家は、あの現人神天皇の統べ治める美しい祖国は、もうどこにもないのだ。

わたし (モノ)わたしは、こんなもろいもののために生きてきたのか…。

ナレーション やりきれない思いが、体中を埋め尽くした。

沢本 大宮が釈放されたのは知っているのか？

わたし 大宮が？ そうか…。今度はこっちが冷や飯を食う番だ。彼にしてみりゃ、さぞいい気持ちだろうな。

沢本 いや、それは違うな。

わたし え？

沢本 大宮はそんな男じゃない。いや、あいつの信じているキリスト教はそんな宗教じゃない、と言ったほうがいいな。

ナレーション 大宮牧師は拷問を受けても決して信仰を捨てなかった。あの時、ほかにも政治的な理由で捕らえられた者たちが多くいた。しかし、彼らが決まって我々に示したような敵意を、彼からは感じたことがなかった。なぜなんだ？

沢本 大宮は、釈放されてから毎日、一番町でキリスト教の話をしている。わたしも大宮も、信じるものに命をかけてきた。わたしのはもうなくなってしまったが、大宮のはまだある。君も、一度立ち聞きしてきたらどうだ。あいつの信じ

ているものをな。

ナレーション そう言われたものの、大宮をさんざん痛めつけたわたしが、すぐに話を聞きに行けるはずがなく、行こうか、行くまいか、迷う日々が続いた。そうしている間にも、日本はどんどん変わっていった。

ナレーション しばらくしたある日、とうとうわたしは意を決して、大宮が説教をしているという一番町へ向かった。ビルディングの角を曲がると、果たして一人の男が熱心に話している姿が目に入った。

大宮 …皆さん、長く苦しかった戦争は終わりました。しかし、これで本当に平和が来るのでしょうか。国と国が争いをやめれば、それで平和になるのでしょうか。そうではありません。わたしたちの心の中に本当の平和がなければ、不安や恐れ、憎しみや争いがなくなることはないのです。皆さんの心には、本当の平和、平安な気持ちがあるでしょうか。

ナレーション あのところより大分やせてはいたが、間違いなく大宮牧師だった。

大宮 わたしたちの回りの環境は変わっていきます。しかし心に本当の平和を持つ人は、回りがどうであろうと、その平和を失うことがないのです。皆さん、このような平和は、わたしたち人間の努力では得ることができません。唯一まことの神様にのみ、おできになるのです。聖書はこう言っています、「平和をつくるものは幸いなり。その人は神の子となえられん」。これは神のみ子イエス・キリストの言葉です。このお方は、自ら神と人との平和の架け橋とられました。皆さん、真の平和を妨げるものは、人間の心の中の罪です。己を義とし、他人を裁き、死にまでも至らせようとする恐るべき傲慢です。日本人であるわたしたちは、今こそ一人一人神の前に悔い改めなければなりません。キリストは、十字架の上でこの敵意をご自分の命と引き替えに砕いてくださったのです。そして、ご自身を死に追いやった人々のために、十字架の上でこう祈られました。「父よ。彼らを赦したまえ。そのなすところを知らざればなり」。

わたし (モノ)「そのなすところを知らざればなり」…。

ナレーション その時、わたしの体の中を何か突き抜けた。神のみ子だというキリストが十字架の上で叫んだというその言葉に、あの大宮牧師の目が一瞬重なった

のだ。そして、自分が正しいと信じながら今までやってきたことが、何かとんでもない大きな間違いだったような気がした。殴られても蹴られても、静かにほほえみさえ浮かべて、わたしのために祈るといった時のあの目。確かに彼の目に恐れはなかった。あの時、彼はわたしをすでに赦していたのか。だとすれば、我々の憎しみと敵意の中で、彼は本当に平和だったのだ。もう何も信じられなくなった今のわたしにも、あの目なら、そして、人の心にあの目を与えられる神なら、信じられる気がした。

大宮                    皆さん、このお方のうちに、真の平和があるのです。このお方を受け入れ、まずあなたの心に、神との平和を回復なさいませんか？

ナレーション        気がついたら、わたしは大宮牧師の方へ一歩、歩き出していた。今度こそわたしの名前を打ち明け、祈ってもらうために。

<完>

---